

ひそかに 読まれている本

『摩滅の賦』 四方田犬彦

Yomota Inuhiko

(筑摩書房 2800 円+税)

Tel.048-651-0053



「摩滅学」というジャンルの創造

平尾隆弘 (編集者)

こす 擦る, な 撫でる, さす 摩る, みが 踏む, な 磨く, ひ 舐める,
しゃぶる, 研ぐ, 碾く……。

これらはすべて「摩滅」にかかわる動詞である。あるときは手足を用い, あるときは白や砥石などの道具を用い, 人間は対象物の「摩滅」に力を貸してきた。「摩滅」は人為的にもたらされるだけではない。大自然の作用によって, 建造物は廃墟と化し, 美術品は毀損する。貝や石ころは微小な粒子となり, やがて消滅する。爪や歯に典型的に見られるように, 人体も生きながら「摩滅」を告知されている。零落, 落魄はあらわになった人生の「摩滅」の相である。

四方田犬彦の『摩滅の賦』は, こうした「事物の退行」をさまざまな面からとりあげた本だ。

著者は自らの「偏愛」をこう語っている。

「使い古された石臼のなだらかな目立て。長時間にわたる手術の末にようやく摘出された, 疲弊と萎縮の極にある臓器。数えきれない善男善女の手で撫で擦られたため, もはや目や鼻の位置も定かでなくなり, 単に黒光りする木片同然の身となってしまった仏像。表面の艶やかな色彩の記憶も遠のき, 優雅な尖端も欠落させ, もっぱら細部の不在によって一様に特徴づけられるこうした事物が, わたしを恍惚とさせる」(p 5・6)

思いもかけなかった視点から, たとえば,

「小石や貝殻が水を得て(つかのま)輝くのは, それが他ならぬ水によって摩滅され, 緩慢たる消滅へ向かうことを運命づけられているからではないだろうか」(p 31)

「砥石とは, みずから摩滅することを代償として他を摩滅させてゆく希有の道具である」

(p 125)

といった思いもかけない言葉がくり出される。「摩滅」を主題にすれば, アンコール・ワットの遺跡も, 口の中で次第に溶けていくドロップも, 「角がとれて丸くなった」という人格の形容語も, すべてが考察の対象となる。

「摩滅」という視点は, 日本的美意識とは似て非なるものだ。それは「いま・ここに」という現実の枠組や固定した観念を, 時間によって相対化する方法だといえるかもしれない。

著者の「摩滅」への偏愛には年季が入っている。何しろ中学3年(!)のとき, モンテーニュ『エッセー』を引用して, 「哲学すること, それはどのように死ぬかを知ることだ」と書いているのだから。以来, ポール・ボウルズ風にいえば, ツーリスト(観光客)でなくトラヴェラー(旅行者)として, 著者はたえず「現実」を相対化してきた。海外(韓国, アメリカ, イタリア)に住み, 表現の対象も, 文学, 漫画, 映画, 演劇, 美術, 音楽, 都市論, 料理と多岐にわたっている。『摩滅の賦』は, 従来の知見を総動員し, 「摩滅学」という新しいジャンルを創造した, 四方田犬彦にしか書きえない本である。

たしか, 宇野信夫のエッセイで読んだと思う。初恋の女性の足首(?)に, とても印象的な黒子があった。数十年の歳月がたち, そのひとの姿形も顔も表情も, すべて忘れてしまった。覚えているのは, ポツンと残った黒子だけである, と。かくいう私自身, 黒子の位置が足首と書かれていたかどうか, 実はおぼつかない。これもまた, 私たち誰しもに訪れる, 記憶の摩滅の一挿話といえようか。

